

『嵐が丘』試論

—浄罪と再生を求めて—

瀬尾 勲 夫

An Essay on *Wuthering Heights*
—Searching for Purgation and Resurrection—

Isao SEO

Abstract

If there is a God, who is good, omniscient and omnipotent, why are there so many absurdities and disharmonies in this world? How is it possible that God and unreasonable Evil exist together here? Indeed, this is the fundamental inquiry into the metaphysical problem of God and Evil, which Emily Brontë, to be sure, is not indifferent to. She says, "All creation is equally mad. . . . Nature is an inexplicable problem, it exists on a principle of destruction; . . . why was man created?" The darkest meaning of this assertion of hers is the fact that no man can understand why a good God should have chosen to create such a world at all. But Emily Brontë tries to find the affirmative elements in what looks negative. According to her, the world is the ugly sight it appears to mortal eyes, and at the same time those same elements are glorified and transformed into their opposites. Every bit of suffering, violence, and sin are necessary to the ultimate transfiguration, just as the ugly caterpillar is the beginning of the splendid butterfly. This paradoxical conclusion of Emily Brontë's view of the human condition leads us to her belief that suffering sin brings will be sufficient expiation for that sin. Every person is fated to commit a certain number of sins and to suffer a certain amount of pain before he can go to heaven. A certain number of sins are necessary to exhaust evil and to make possible his resurrection into the new life. This paradox causes the inversion of values in her works. This is why the world of *Wuthering Heights*, though miserable, is not God-forsaken and this book is sure to search for purgation and resurrection.

序

西欧キリスト教文学の重要なテーマの一つに、神の創造した善なる世界に潜む不条理性を指摘できる。この世界に存在する苦しみ、罪、死、といった否定的要素と、歓び、善、生等と言った肯定的要素の同時的存在の矛盾、不合理性に関して、神学者、文学者を含めて何人も無関心を装うことは不可能であろう。この小論で取り上げるエミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-1848) も、「何故、神はこのような不条理な世界を創造したのか」という問題に無関心ではいられなかった作家の1人である。

エミリーは、姉、シャーロットとのブリュッセル留学中に書いたエッセイ「蝶」(The Butterfly) の中で次のように語る。

All creation is equally *mad*. [italics not in the original] Behold those flies playing above the brook; the swallows and fish diminish their number every minute. These will become, in their turn, the prey of some tyrant of the air or water; and man for his amusement or his needs will kill their murderers. Nature is an inexplicable problem; it exists on a principle of destruction. Every being must be the tireless instrument of death to others, or itself must cease to live, ...¹⁾

(あらゆる生き物は、すべて気が狂っている。小川の上を飛び交う蠅を見てみよ。刻々、燕や魚がその数を減らしている。しかし、その燕や魚といえども、次には空と水を支配するより強い生き物の餌食となるであろう。また、人間は、その楽しみや必要のために、それらを殺したものたちを殺すだろう。自然は不可解な謎であり、且つ破壊の原理に基づいて成り立っている。すべての生き物は、他の生き物が生きるためには不断の死の

1) *The Belgian Essays: Charlotte Brontë and Emily Brontë* edited and translated by Sue Lonoff (New Haven and London: Yale University Press, 1996), p. 176.

エミリーは、姉、シャーロットとのブリュッセル留学中に、フランス語で九編のエッセイを残している。そのエッセイ集は、最近では約50年前に、英訳され出版された *Five Essays written in French* (University of Texas Press, 1948) があるが、なにせ出版後約半世紀を経た現在、絶版状態にあり入手が極めて困難な状態にある。しかし、幸いにも約5年前に、上記に示したフランス語の原文と英訳の両方が併記されたエッセイ集 *The Belgian Essays* が出版される。以下、本文中の引用はすべてこの版に拠る。

道具とならなければならない。さもなければ、自らその命を断たなければならないのである、・・・)

ブロンテ研究家のヒリス・ミラー (Hillis Miller) 氏も、この点に触れて、次のように述べている。

The darkest meaning of Emily Brontë's assertion that "all creation is equally insane" is the fact that no man can understand why a good God should have chosen to create such a world at all. Each man's life, like that of any other creature of nature, is merely a sequence of violent acts done or suffered, and it ends in death.²⁾

(あらゆる生き物は、すべて気が狂っているというエミリー・ブロンテの主張の最も陰鬱な意味は、善なる神が一体何故そのような世界を創造しようとしたのかということをも人間が誰一人理解出来ないということにある。人間の命も所詮、自然界の他の生き物と同じく、ただ単に暴力行為とその苦痛の連続にすぎず、最終的にはその命も死において終わるだけなのである。)

このように、エミリーの描く世界は、神の慈悲から遠く離れた悪そのものともいえる非常にペシミスティックな世界である。事実、エミリーは、善なる神が創造した世界における人間存在の意義そのものについて、次のような疑問を投げかけている。

... why was man created? He torments, he kills, he devours; he suffers, dies, is devoured — there you have his whole story.³⁾

(・・・どうして人間は創造されたのか。人間は周りの生き物を痛めつけ、殺し、貪り食うと同時に、逆に、人間は苦しみを受け、貪り食われ、死んでゆく — それが人間の一生というものだ。)

更に、こうしたエミリーの神への疑念は次のように膨らんでいく。

2) *The Disappearance of God* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1963), p. 165.

3) *The Belgian Essays*, p. 178.

During my soliloquy I picked a flower at my side; it was fair and freshly opened, but an ugly caterpillar had hidden itself among the petals and already they were shriveling and fading. "Sad image of the earth and its inhabitants!" I exclaimed, "This worm lives only to injure the plant that protects it. Why was it created, and why was man created?" . . . I threw the flower to earth. At that moment the universe appeared to me a vast machine constructed only to produce evil. *I almost doubted the goodness of God, in not annihilating man on the day he first sinned.* [italics not in the original] "The world should have been destroyed," I said, "crushed as I crush this reptile which has done nothing in its life but render all that it touches as disgusting as itself."⁴⁾

(独り物思いに沈む中、私はすぐ傍の花を摘みました。その花は可愛くて咲いたばかりでした。でももう醜い毛虫がその花びらの中に潜んでいたのです。既に花びらは萎み、しおれていました。「大地とそこに生きている物の哀れな姿だ」と、私は叫びました。「この毛虫はその身を守っている花びらを枯らすしか生きていけないのだろうか。何故この毛虫は創造されたのか、どうして人間は創造されたのか？」 . . . 私はその花を地面に投げ捨てました。その瞬間、宇宙は、ただ悪を生み出すためにだけ造られた巨大な機械であるかのように思われました。人間が最初に罪を犯したその日に、何故、神は人間を滅ぼしてしまわなかったのか、神の慈悲というものに私は大いに疑問を抱きました。「神はこの世を壊し、潰しておくべきでした、ちょうど私がこの毛虫を潰したように。何故なら、この毛虫は、生きている時には、触れるものすべてを自分と同じように不快なものにするだけだったのですから。」

このように悪と不合理の充満した世界において、仮にも人間が罪を犯さず生きてゆくことなどまず不可能なことである。事実、エミリーの作品に登場する人物たちは、すべてその運命に抗えば抗うほど罪を重ね、且つその罪の深みに嵌ってゆき、結果的に底知れぬ救い無き苦しみの状態に落ち込んでいくのである。彼らが如何に幸せ、歓びを追い求めようと行動したにしても、最終的には彼らには己の罪と苦しみを確認しながら一步一步死の国へ近づいていく道しか

4) *Ibid.*, pp. 176-178.

残されていないのである。例えば、エミリーの詩⁵⁾ (No.32) は、こうしたエミリーの抱くペシミスティックとも思える主張を次のように語っている。

Wasted, worn is the traveller;
Dark his heart and dim his eye;
Without hope or comforter,
Faltering, faint, and ready to die.

Often he looks to the ruthless sky,
Often he looks o'er his dreary road,
Often he wishes down to lie
And render up life's tiresome load. (53)

(旅人は疲れ果て、衰えて、
その心は暗く、目もかすみ、
希望も、慰め手も無く、
よろめき、気は遠く、死の覚悟をして。)

幾度も無情な空を見上げ、
幾度も物憂い道を眺め、
幾度も身を横たえて、
人生の煩わしい重荷を投げ出したくなる。)

こうしたエミリーの主張は、「万物すべて死すべきもの、並びに人間は死ぬために生きている」と言った彼女の暗い人生観をその思考の前提としていると考えられる。引続いて、詩 (No.170) を見てみよう。

“O mortal, mortal, *let them die*; [italics not in the original]
Let Time and Tears destroy,
That we may overflow the sky
With universal joy

5) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* edited by C. W. Hatfield (New York: Columbia University Press, 1961)。以下、本文中の引用はすべてこの版に拠る。

Let Grief distract the sufferer's breast,
 And Night obscure his way;
 They hasten him to endless rest,
 And everlasting day.

To Thee *the world is like a tomb*, [italics not in the original]
 A desert's naked shore;
 To us, in unimagined bloom,
 It brightens more and more.

And could we lift the veil and give
 One brief glimpse to thine eye
 Thou would'st rejoice for those that live,
Because they live to die." [italics not in the original] (200)

(「おお、人間よ、人間よ、死ぬがよい、
 「時」と「涙」に滅ぼさせるがよい、
 あまねく行き渡る喜びを
 空をいっぱい満たすことができるように。

「悲哀」が苦しむ者の胸をかき乱し、
 「夜」が行く道を暗くするがよい、
 それらが彼を終わりのない休息と
 永遠の日へ急がせるがよい。

おまえにとってこの世は墓のようなもの、
 砂漠の不毛の岸だ。
 我々にとっては、想像も及ばぬ華麗さに
 いよいよ輝きを増すばかり。

そしてもし我々が帳を上げて
 おまえの目にほんの一瞬でも垣間見ることが許すならば、
 おまえは生きている者のことを大いに喜ぶだろう、
 彼らは死ぬために生きているのだから」)

以上、ここまでで理解されるエミリーの思想の最も暗い部分は、「善なる神は、滅亡の原理に基づいて成立しているこの狂った世界を何故創造したのか？そこでは仮にも人間が罪を犯さずに生きてゆくことなどまず不可能で、最終的にはその命も虚しい死において終わるしかない」というただ一点に要約されるであろう。特に、既述したエミリーの言葉、「あらゆる生き物は、・・・自らその命を断たなければならない」^(註.1を参照)は、そうした彼女の陰鬱な主張を最も雄弁に物語ったものと受け入れてよい。しかし、ここで騙されてはならないのであるが、この陰鬱な主張は彼女の最終的な結論ではないということである。その根拠として、上記引用文^(註.1)の直後に続く次の文章が重要な参考資料となる。

...., yet nonetheless we celebrate the day of our birth, and we praise God for having entered such a world.⁶⁾

(・・・しかし、それにもかかわらず、我々はこの世に生を受けたことを喜び、そのことで神を賛美しなければならないのである。)

これで分るように、一見、すべてを否認し、すべてを否定する方向に向かうかに思えるエミリーの陰鬱な主張は、ここで一転してその逆、肯定へと大きく進路変更をするのである。

彼女の詩 (No. 183) を見てみよう。

Heartless Death, the young leaves droop and languish!
Evening's gentle air may still restore —
No: the morning sunshine mocks my anguish —
Time for me must never blossom more!

Strike it down, that other boughs may flourish
Where that perished sapling used to be;
Thus, at least, its mouldering corpse will nourish
That from which it sprung — Eternity. (224-225)
(無情な「死」よ、若葉は萎れ衰えてゆく！)

6) *The Belgian Essays*, p. 176.

夕暮れの優しい風がまだ生気を取り戻すかもしれない —
 いや、朝日の煌きが私の苦悩をあざ笑う —
 時はもはや私のために花開くことはないに違いない！

あの枝を打ち倒すがいい、かつて枯れ死した若木があったところに
 他の大枝が生い茂るように。
 そのようにして、少なくとも、朽ちていく屍は
 それがかつて芽生えた源を — 「永遠」を養い育てるであろう。）

この詩には、「死」という否定的要素の中に、肯定的要素を見出そうとして
 いるエミリーの姿勢が明白に感じられる。エミリーにとって、死こそ新しい生
 命の源、即ち、次に提示する詩 (No. 177) で詠われる見事な逆説的表現、「種
 子」(seed) となるのである。

“For, if your former words were true,
 How useless would such sorrow be!
 As wise to mourn *the seed* [italics not in the original which grew
 Unnoticed on its parent tree,

“Because it fell in fertile earth
 And sprang up to a glorious birth —
 Struck deep its roots, and lifted high
 Its green boughs in the breezy sky! (211)

(「と言うのは、あなたの以前の言葉が真実であるなら、
 そのような悲しみはなんと無駄なことでしょう。
 人知れず、親木の上に
 育つ種子を嘆くようなものです。

なぜなら、種子は肥沃な土に落ち
 芽を出し、栄光ある誕生を迎え —
 地中深く根を張り、そよ風の吹く空に
 高々と緑の大枝を広げるからです。)

かくして、死はその新しい命「種子」(seed) の中に生き、そこにこそ「永

遠」、即ち神の存在がいわば逆説的に暗示されているとエミリーは主張するのである。言ってみれば、エミリーにとって死とはこの永遠、神に到達するためのほんの入り口にすぎないのである。詩 (No. 191) は次のように語る。

O God within my breast
 Almighty ever-present Deity
 Life, that in me hast rest
 As I Undying Life, have power in Thee

 There is not room for Death
 Nor atom that his might could render void
 Since thou art Being and Breath
 And what thou art may never be destroyed. (243-244)

(ああ、私の胸のうちに宿る神
 常に現存する「全能の神」よ
 あなたは私の内に安らぎを与える命、
 ちょうど「不死の命」たる私が「あなた」から力を得るように
 (中略)
 そこに「死」の入る余地はない
 「死」の力が無に至らしめるような原子も無い
 あなたは「実在」であり「息吹」であり
 あなたの実体は決して破壊されることは無いのだから。)

上記の詩は、死を超越したエミリーの抱く神への揺るぎなき絶対的な信頼感を物語る以外の他の何物でもない。そして、この神への信頼感があればこそ、エミリーにあっては怒りの神、不条理の神が何時しか慈悲(愛)の神へと変容していくことは当然の成り行きである。この点に関して、詩 (No. 133) を見よう。

.
 Shall these long, agonising years
 Be punished by eternal tears?

No; *that* I feel can never be;

A God of *hate* could hardly bear
 To watch through all eternity
 His own creations dread despair! (138)

(.)

この長い苦しみに満ちた年月が
 永遠の涙で罰せられるだろうか。

いいえ、そのようなことは決して無いのだ
 たとえ憎しみの神といえども
 みずから創った者たちが絶望に恐れおののくのを
 未来永劫に見るには、耐えられないであろう。)

つまり、エミリーは、人間が如何に罪を犯したにしても、死の床にあって死を迎えた最後の最後の瞬間に、神からの救いの手が差し伸べられることを信じて疑わない作家なのである。言ってみれば、エミリーは、T. S. エリオットの述べる「地獄に墮ちることそのものがある種の手っ取り早い救いである」(damnation itself is an immediate form of salvation)⁷⁾、並びに「人間の栄光は、救われる可能性にあるということに間違いはないが、同時に地獄に墮ちる可能性の中にも人間の栄光がある」(It is true to say that the glory of man is his capacity for salvation; it is also true to say that his glory is his capacity for damnation.)⁸⁾という、いわば逆説的キリスト教信仰の本質を良く知り抜いていた作家だったのではなかろうか。事実、次に掲げる詩 (No. 61) は、罪を犯し、地獄に墮ちるしかない運命を背負った人間に、死を通してこそ真の救いが与えられるという逆説的真理を明白に示す重要な作品として大いに注目に値する。

Call Death — yes, Death, he is thine own!

.

If thou hast sinned in this world of care,
 ‘Twas but the dust of thy drear abode —
 Thy soul was pure when it entered here,

7) *Selected Prose* (Penguin Book, 1953), p. 181.

8) *Ibid.*, p. 183.

And pure it will go again to God. (71)

(「死」を招きなさい、ええ、「死」こそあなたのものです！

もし、あなたが憂いに満ちたこの世で罪を犯したとしても
それは荒涼としたあなたの住処の埃にすぎません。
あなたの魂はこの世に生を受けたときは清らかでした、
そしてその清らかな姿でふたたび神のもとへ帰ってゆくのです。)

更に、既に示した詩 (No. 177) の一部でも、ほぼ同じ主旨の内容が次のように詠われている。

Their happy souls are gone to God!

“But I’ll not fear — I will not weep

For those whose bodies lie asleep:

I know there is a blessed shore

Opening its ports for me and mine;

And, gazing Time’s wide waters o’er,

I weary for that land divine,

“Where we were born — where you and I

Shall meet our dearest, when we die;

From suffering and corruption free,

Restored into the Deity.” (211)

(彼らの幸せな魂は神のもとへ行ってしまいました。

(中略)

でも私は恐れはしません — 私は泣いたりしません

その亡骸が眠り、横たわる人たちのために。

私と私そのものである人たちのために、港を開いている
祝福された岸辺のあることを私は知っています。

「時」の広大な海原を見つめながら、

私はあの神々しい国を待ち焦がれております、

「そこは私たちの生まれたところ — そこはあなたと私が

死んだ時、最愛の人と巡り会うところです。

苦悩と墮落から解き放たれ

「神」のもとへ立ち帰った時))

ここには、「死」こそ「魂の解放」というエミリーの主張が明白に感じ取れるように思われる。例えば、この点については、従来、エミリーの人間観を良く表現しているとの定評のあるエッセイ、即ち、ノーマン・コンクウェスト(1066)の際、ヘイスティングの戦いで敗れたハロルド王の英雄的な死について語った「ヘイスティングの戦い前のハロルド王」(King Harold before the Battle of Hastings)の次の文章が参考になる。

He is inwardly convinced that a mortal power will not fell him. The hand of Death, alone, can bear the victory away from his arms, and Harold is ready to succumb before it, because the touch of that hand is, to the hero, what the stroke that gave him liberty was to the slave.⁹⁾

(ハロルド王は、如何なる人間の力も自分を打ち倒すことはない、心ひそかに確信している。死神の手のみが、ハロルド王から勝利を奪い取ることが出来、ハロルド王も死の前には従う覚悟は十分に出来ている。何故なら、ハロルド王にとって、死神の手に触れることは、まさに奴隷が鎖を取り除かれて自由を得ることと同じ意味を持つのである。)

これで分るとおり、エミリーは最終的にはこの世の「埃」とも呼べるべき罪からの魂の浄罪を信じているのである。そして、まさにこの「魂の浄罪」こそ、彼女の代表作、『嵐が丘』の持つ重要な主題の一つと考えられるのである。確かに、この作品に登場するヒースクリフとキャサリンの二人は、生存中、数々の罪を犯し、その罪ゆえに苦しみ死を迎える。しかし、結局はその苦しみ、罪によってこそ彼らの魂は逆に清められていくのだという逆説的結論へ、エミリーは読者を導いていくのである。この点について、エミリーは、同じくエッセイ「蝶」の中で次のように述べる。

God is the god of justice and mercy; then surely, every grief that he

9) *The Belgian Essays*, p. 98.

inflicts on his creatures, be they human or animal, rational or irrational, every suffering of our unhappy nature is only a seed of that divine harvest which will be gathered when, Sin having spent its last drop of venom, Death having launched its final shaft, both will perish on the pyre of a universe in flames and leave their ancient victims to an eternal empire of happiness and glory.¹⁰⁾

(神は正義と慈悲の神である。であるなら、間違いなく、神が己の創造物に与える深い苦悩、つまり、それが人間であろうと、動物であろうと、理性のあるものでであろうと、理性のないものでであろうと、この不幸な自然界に存在する各の苦しみは、聖なる収穫のために刈り取られた一粒の種になるのである。そしてこの時、「罪」はその毒を最後の一滴まで使い果たし、「死」はその最後の矢を投げ捨て、共に宇宙の葬儀のために積まれた火葬用の薪の上で燃え盛る炎の中で消滅し、結果、それまで罪と死に苦しんだ人たちを歎びと栄光に輝く永遠の世界へと導いてゆくのである。)

更に、詩 (No. 190) に拠れば、

“Yet I would lose no sting, would wish no torture less;
The more that anguish racks the earlier it will bless;
And robed in fires of Hell, or bright with heavenly shine,
If it but herald Death, the vision is divine.” (239)

(でも私は激しい苦痛が無くなり、苦しみが今より薄ければ良いとは思いません。

苦しみが苦しみを強めるだけ、それだけ一層神の恵みは早くなるでしょう。

また、地獄の炎に包まれ、或いは天上の輝かしい光に照らされようと、もしそれが死を予告するものであれば、その幻は神聖なものとなるのです。)

J. F. グッドリッチ (J. F. Goodridge) 氏も、この点を認めて、「エミリーの抱く死と苦しみを乗り越えて広がる神への信頼、充実感には、非常に説得力が

10) *Ibid.*, pp. 178.

ある」(the sense of fullness and fruition, stretching beyond death and pain, is wholly convincing.)¹¹⁾と指摘する。

以上、エミリー・ブロンテがその作品の中でこの矛盾と不条理に満ちた世界、即ち、愛と憎悪、生と死、神と悪魔、歓びと苦しみ、罪と浄罪といった相対立する様々な要素が交錯する世界を取り上げ、その中で苦しみ、罪を通しての魂の浄化、並びに解放という、エミリー自身の言葉を借りれば、「たとえ罪を犯したとしても、人は清らかな姿で再び神のもとへ帰る」というテーマを深く掘り下げていった作家であるということに異論はあるまい。以下、このテーマを、彼女の唯一の代表作、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)¹²⁾の中に具体的に探ってみることにする。

(一)

ブロンテ研究家、ロバート・マッキベン (Robert C. Mckibben) 氏は、「嵐が丘の世界は苦しみで支配されている」(The atmosphere of the Heights is dominated by suffering)¹³⁾、更に、「最終的にこの苦しみを通して初めて悪が清められ、安らぎが可能となる」(It is through suffering that evil is eventually purged and happiness made possible)¹⁴⁾と述べて、上述のエミリーの主張に共感を示している。確かに、氏の指摘を待つまでもなく、『嵐が丘』における「苦しみ」の持つ意味は重要である。このことから、最初に、物語の主人公、ヒースクリフの苦悩から論を進めてみたいと考える。

ヒースクリフは、物語のもう一人の主人公である恋人、キャサリンの死の床に直面して、自己の魂そのものであるキャサリンを葬った後の虚しい世界に生きる苦しみを次のように語っている。

Do I want to live? What kind of living will it be when you — oh, God!

11) “A New Heaven and a New Earth” in *The Art of Emily Brontë* (Vision Press, 1976), p. 171.

12) *Wuthering Heights* (New York: Portland House Illustrated Classics, 1987)。以下、本文中の引用はすべてこの版に拠る。

13) “The Image of the Book in *Wuthering Heights*” in *A Wuthering Heights Handbook* (New York: The Odyssey Press, 1961), p. 229.

14) *Ibid.*, p. 235.

would *you* like to live with your soul in the grave? (171)

(何で俺が生きていたいと思うだろうか？ 一体どんな人生が残されているというのだ、もしおまえが——ああ、神よ！ 自分の魂であるおまえを墓の中に埋めて、誰が生きていたいと思うのだ？)

更に、家政婦、ネリーの口からキャサリンの臨終の様子を聞き出した時、ヒースクリフは絶望のあまり激情の発作に襲われ、叫びにも似た次のような言葉を吐くのである。

— Catherine Earnshaw, may you not rest as long as I living! You said I killed you — haunt me, then! The murdered *do* haunt their murderers, I believe. I know that ghosts *have* wandered the earth. Be with me always — take any form — drive me mad! only *do* not leave me in this abyss, where I cannot find you! Oh, God! it is inutterable! I *cannot* live without my life! I *cannot* live without my soul! (178)

(キャサリン・アーンショー、俺がこの世に生きている限り、おまえは安らかに眠るなかれと！ おまえは俺がおまえを殺したと言ったが——それじゃ、亡霊となって俺のところに出て来い！ 殺された者は殺した者のところへ化けて出るというじゃないか。亡霊がこの世をさ迷い歩いた例を俺は知っている。いつも俺と一緒にいてくれ——どんな姿でもいい——俺の気を狂わせてくれ！ ただおまえの姿の見えぬこの深淵に、俺を置き去りにしないでくれ！ おお、神よ！ 言葉にはならぬ苦しみよ！ 俺は俺の命無しには生きて行けない！ 俺の魂無しに俺がどうして生きて行けよう！)

これこそ自己の「魂」であり「命」であるキャサリンを亡くし、奈落の底に突き落とされた者としてのヒースクリフが発する真の意味での苦痛の呻き声であり、これによってヒースクリフの苦悩の深さを十二分に推し量ることが出来るというものである。

更に、このヒースクリフの苦しみの深さをより深化させるものとして、皮肉にも、彼の持つ肉体の並外れた強靭さを指摘しておくことも興味深い点である。

So much the worse for me, that I am strong! (171)

(自分の体が頑丈なことは、それだけ一層、俺を苦しめるのだ)

つまり、頑丈な肉体を保持するが故に、逆にヒースクリフはキャサリンのいないこの世に縛られ、苦しみ続けなければならないと言う逆説の成立である。自分の周りに存在するすべての物が「キャサリンは生きていた、俺はあの人を失ってしまった」と言うことを彼に思い起こさせる記念品の一大コレクションであり、そのことによって彼は昼夜を問わず悩まされ続けるのである。その結果、彼はこの世という生き地獄の中にただ一人残され、全くの孤独な年月を苦しみ抜いて虚しく生きていかなければならないのである。そして、この孤独こそ、エミリーがヒースクリフに与えた更なる苦悩と呼べるべき物の本質なのである。実際、彼は、この更なる苦悩の中で底無しの孤独のうちにキャサリンの亡霊を絶えず追い求め続けるという過酷な運命を背負うこととなるのである。例えば、キャサリンが埋葬された日、もう一度キャサリンを胸に抱こうと願って彼女の埋葬された墓を掘るヒースクリフは、自分のすぐ近くにキャサリンの存在の気配を次のように強く感じ取るのである。

I was on the point of attaining my object, when it seemed that I heard a sigh from someone above, close at the edge of the grave, and bending down. . . . There was another sigh, close at my ear. I appeared to feel the warm breath of it displacing the sleet-laden wind. I knew no living thing in flesh and blood was by; but, as certainly as you perceive the approach to some substantial body in the dark, though it cannot be discerned, so certainly I felt that Cathy was there: not under me, but on the earth. A sudden sense of relief flowed from my heart through every limb. I relinquished my labour of agony, and turned consoled at once: unspeakably consoled. Her presence was with me: it remained while I refilled the grave, and led me home. You may laugh, if you will; but I was sure I should see her there. I was sure she was with me, and I could not help talking to her. Having reached the Heights, I rushed eagerly to the door. (316)

(もう少しでキャシーに手が触れるという時に、誰かが、上の墓穴の縁近くにかがみこんで、ため息をつくのが聞こえたような気がした。(中略) 又、すぐ耳元近くで、ため息が聞こえる。その温かい息づかいが曇混じりの風にとって代わって、俺にかかったような気がするのだ。血の通った人間がそばにいないことは分っていた。しかし闇の中でたとえ姿は見えなくとも、人の気配が分るように、俺ははっきりとキャシーがそこにいるのを感じた——俺の足の下にではなく、地面の上にだよ。急に、救われたよう

な感じが俺の心臓から全身へ流れて行った。とっさに俺は苦しい穴掘りの仕事を止め、ほっとして振り返った。実際、なんとも言えないほどほっとした気持だった。キャシーが俺の傍にいたのだ。俺が墓穴の土を埋めている間も傍にいてくれて、俺を家へ連れて帰ってくれたのだ。笑いたければ笑ってくれ。しかし、俺は家へ帰っても彼女に会えるものと思い込んでいた。彼女が俺の傍にいるという確信があり、俺は彼女に話しかけずにいられなかったほどだ。嵐が丘へ着くなり、俺は夢中で戸口へ走り寄った。

上記の文章は、ヒースクリフが単にキャサリンの亡霊の気配をほんやりと感じているといった類の話ではなく、確実に彼女の存在そのものを実感していると言う点で極めて重要である。雪の舞う冷たい風の中に、彼女の「温かい息」そのものを感じとり、はたまた「血と肉を持った生き物がそばにいないことは分っているのだが」と言って、キャサリンが死んだと言う現実を受け入れつつも、未だに彼女の死を認めきれないヒースクリフは、「もう一度、キャシーを俺の腕の中に抱こう！もしその体が冷たかったら、冷や冷やするのはこの北風のせいだと思おう。又彼女が動かなかったら、それは眠っているからだと思おう」

(I'll have her in my arms again! If she be cold I'll think it is this north wind that chills *me*; and if she be motionless, it is sleep, 314) と行って、あくまでこの「地の上」にキャサリンの存在を実感しようとするヒースクリフの独白は、自己の「魂」を葬り去った後も尚且つキャサリンの亡霊を追い求めて生き続けなければならない彼の「苦しみ」の深さを物語る以外他の何物でもあるまい。以来18年間、ヒースクリフはキャサリンの幻を一目見たいという燃えるような欲望に駆られ、地上のあらゆるところにキャサリンの姿を捜し求め続けるのである。

When I sat in the house with Hareton, it seemed that on going out, I should meet her; when I walked on the moors I should meet her coming in. When I went from home, I hastened to return: she *must* be somewhere at the Heights, I was certain! And when I slept in her chamber — I was beaten out of that. I couldn't lie there; for the moment I closed my eyes, she was either outside the window, or sliding back the panels, or entering the room, or even resting her darling head on the same pillow as she did when a child; and I must open my lids to see. And so I opened and closed them a hundred times a night — to be always disappointed! It racked me! (316-

317)

(ヘアトンと一緒に居間に座っていると、今外へ出たらキャシーに会えるかも知れないと思い、逆に荒野を歩いていると、今家へ帰ったらキャシーに会えそうな気がしてくるのだ。だから家を離れると、いつも帰るのが急がれる始末なのだ。きっと嵐が丘の何処かにキャシーはいるに違いないという確信があったのだ！それからかつての彼女の部屋に眠ると——俺はどうしても部屋から追い出されてしまう。到底俺はあの部屋では寝られなかった。目をつぶると、キャシーが窓の外にいるような気がしたり、或いは箱寝台の羽目板の扉を引き開けたり、或いは部屋へ入りかけているような、時には子供の頃よくそうしたように、俺と同じ枕にあの可愛い頭を載せているような気さえして、目を開けて見ずにいられないのだ。そんなふうにして一晩に百篇も目を開けたりつぶったりして——その度にいつも失望ばかりだった！なんと言う苦しみだったろう！)

だがキャサリンはヒースクリフにいつも気配を感じさせるだけで決して姿を現すことは無く、あくまでヒースクリフの欲望を掻き立てるのみである。

I looked round impatiently — I felt her by me — I could *almost* see her, and yet I *could not*! I ought to have sweat blood then, from the anguish of my yearning — from the fervour of my supplications to have but one glimpse! I had not one. She showed herself, as she often was in life, a devil to me! And, since then, sometimes more and sometimes less, I've been the sport of that intolerable torture! Infernal! (316)

(俺はもどかしく部屋の中を見回した——彼女が俺のそばにいるのが感じられた——ほとんど彼女の姿を見ることが出来そうに思った。だがどうしても見ることは出来なかったのだ！一目会いたいという俺の切ない思い——その恋慕の苦しさと、俺は血の汗を流したとしても不思議ではなかった！俺は会えなかった。生きている間もそうだったが、彼女は悪魔のような女として俺を苦しめたのだ！そしてそれ以来、時によって程度の差こそあれ、俺はあの憎むべき呵責の玩具にされてきた！まったく地獄だよ！)

その結果、彼は夜も昼も18年の間、慈悲も情けも無くキャサリンの幻に絶えず安静を乱し続けられていくのである。こう考えてくると、キャサリンの死後、一般に復讐だけを考へて生きていたものとばかり思われていたヒースクリフ

は、実はそうではなく、既述したように、逆に彼は深く苦しんでいたのだということがより鮮明になってくる。そして、当然のことであるが、既述した作者のエミリーの主張に従えば、こうした大いなる苦しみがあるからこそ、ヒースクリフに「魂の浄化」の道も開かれてくると考えられるのである。その萌しは、ヒースクリフの妻、イザベラの発する次の文章の中に微かに窺えるのである。

His attention was roused, I saw, for his eyes rained down tears among the ashes, and he drew his breath in suffocating sighs. I stared full at him, and laughed scornfully. The clouded windows of hell flashed a moment towards me; the fiend which usually looked out, however, was so dimmed and drowned that I did not fear to hazard another sound of derision.
(192)

(やっところちらに注意を向けたのが分ったの。だってあの眼から暖炉の灰の中へ、はらはらと涙が滴り落ちて、息も絶え絶えな吐息に、喉をつまらせたのですもの。私はその顔をまともに見つめて、毒々しい嘲笑を浴びせてやった。その顔の暗く曇った地獄の窓さながらの眼が、その刹那、私に向かってキラッとひらめいた。けれども、普段ならそこから顔を出すはずの悪魔の顔が、すっかり涙に曇って、溺れているものだから、ちっとも怖い気がなくて、又あざ笑ってやったの。)

即ち、それまでの復讐心に燃えた悪魔のようなヒースクリフの姿はすっかり消えて、涙などという女々しい物とは全く無縁の存在であった筈のヒースクリフの「悪魔の顔が、すっかり涙に曇って、溺れている」というの描写の中に、彼の再生の萌し、苦しみから罪の贖い、そして最終的に「魂の浄罪」に至る道への朧気なヒントが感じ取れるのではあるまいか。

(二)

第二段階として、こうしたヒースクリフの受けた大いなる苦悩と彼の死という観点から、ヒースクリフの「浄罪」に至る道についてより詳細に述べてみよう。

『嵐が丘』の主人公、ヒースクリフは恋人のキャサリンのことを、「おお、おれの命よ！」(Oh, my life!)と言い、「キャサリン、俺というものがある限り、死んでもおまえを忘れないことも、おまえには分っている」(Catherine, you

know that I could as soon forget you as my existence! 169) と述べて、二人の切っても切れない親密な関係を強調している。更に、こうした二人の愛情の深さを示す言葉として幾つか例を示せば、

... misery and degradation, and death, and nothing that God or Satan could inflict would have parted us. (171)

(・・・不幸も、墮落も、死ですらも、いいや神や悪魔が与えうるどんなものも、裂くことの出来ない俺たち二人の絆)

If he loved with all the powers of his puny being, he couldn't love as much in eighty years as I could in a day. And Catherine has a heart as deep as I have: the sea could be as readily contained in that horse-trough, as her whole affection be monopolized by him! Tush! He is scarcely a degree dearer to her than her dog, or her horse. It is not in him to be loved like me: how can she love in him what he has not? (158)

(たとえあの女々しいエドガーがあたの貧弱な心と体の全力を尽くして、キャサリンを愛したところで、八十年かかってやっと俺の一日分しか愛せやしないよ。それにキャサリンは俺と同じ深い心を持った女だ、彼女の愛情のすべてをエドガーのごときが独占出来るものなら、大海原の水もわけなく馬の飼葉桶に入ってしまうだろうさ！チェッ！あんな奴はキャサリンにとってはせいぜい飼い犬や、馬と、どれほどの違いもありはしないのだ。俺のように愛されるところが、エドガーには無いのだ。それが無いのにキャサリンがどうしてあいつを愛せるのだ？)

ヒースクリフとキャサリンの絆はどんなことが起ころうとも、どんな障害が生じようとも切れるものではなく、あらゆる事物を超越して永遠に続くものであると言うのである。つまり、二人の繋がり、俗世間一般に見られるような肉体的、精神的な次元を遥かに超えた存在であることが分る。自分のキャサリンに対する愛情の深さはエドガーのそれとは全く比較にならないほどのものであると言う自負、そしてキャサリンも自分と同じ深い心情を持っていると言う彼女に対する絶対的な信頼観は、一般読者の想像力を持ってしては及びもつかないものと感じられよう。又一方、キャサリンも、ヒースクリフへの「愛」を「地底に永遠に眠る巖」(the eternal rocks beneath, 86) と表現することで、この世の全存在の根拠であるヒースクリフと自分は、如何なる変化にも妨げら

れることの無いより深い所で根源的に結ばれていると主張するのである。言ってみれば、彼らは俗に言うところの「運命的絆」によって結ばれていると言っても過言ではないであろう。

とするならば、それほどまでに相思相愛の片割れであるキャサリンが死ねば、ヒースクリフも死を選択して当然と考えられはしないか。実際、ヒースクリフは次のように死を望んでいるとも思えるニュアンスの言葉を何度となく口にする。

Two words would comprehend my future — *death* and *hell*: existence, after losing her, would be hell. (158)

(俺の将来はただ二つの言葉 — 死と地獄につきてしまうだろう。キャサリン亡き後に生きているということは地獄だ。)

Do I want to live? What kind of living will it be when you — oh God! would *you* like to live with your soul in the grave? (171)

(何で俺が生きていたいと思うだろうか？ どんな一生が残されているというのだ、もしおまえが — ああ神よ！ 自分の魂であるおまえを墓の中に埋めて、誰が生きたいと思うのだ？)

I *cannot* live without my life! I *cannot* live without my soul! (178)

(俺は俺の命無には生きて行けない！ 俺の魂無に俺がどうして生きて行けよう！)

上記三つの引用文で明らかなように、キャサリン亡き後、ヒースクリフが「生きること」を否定し、「死」を望み求めている事は明らかであろう。

然るに、ヒースクリフは死を選ぼうとはしないのである。それは何故か？ この読者の抱く疑問は、そっくりそのまま彼の妻、イザベラの疑問となって作中に現れる。

Heathcliff, if I were you, I'd go stretch myself over her grave and die like a faithful dog. The world is surely not worth living in now, is it? You had distinctly impressed on me the idea that Catherine was the whole joy of your life: I can't imagine how you think of surviving her loss. (188)

(ヒースクリフ、もし私があなただったら、キャサリンのお墓の上で寝そ

べって、忠犬みたいに死ぬでしょうに。もうこの世に生きている価値も無いのではありませんの。どう？あなたはキャサリンだけが自分の生きる喜びの全部だって、はっきり私に見せつけていたのではないかしら。あの人が死んじゃった後まで、あなたが生きているなんて、私にはとても考えられないわ。）

しかし、「何故、キャサリンの死後もヒースクリフは生き続けるのか (surviving her loss)」と言うイザベラの疑問に対して、ヒースクリフ本人はもちろんの事、作者、エミリーも全く何も答えようとはしない。この点に関して、大平栄子氏は「キャサリンの死後、ヒースクリフは自己の存在の核、内なる真髓を失い底知れぬ深淵のような世界に独り放り出されたように感じ、虚しく生き続ける苦悩に苛まれながら死を切望する。しかしながら、死を選択することはなく、虚無の暗闇の中で世を呪い続け、復讐の鬼となり、奇怪な死によって、キャサリン不在の18年間にわたる苦渋に満ちた人生を閉じるまで、死への欲求を秘めたまま生き続けるのである」¹⁵⁾と述べているが、この解釈に従えば、上記イザベラの疑問は、「何故、キャサリンの死後もヒースクリフはかくも激しく執拗に生に固執するのか」という疑問に置き換えることが出来るのではないだろうか。

(三)

ところで、前章で指摘したヒースクリフが口にした「死を望む」主旨の台詞をよく吟味してみると一つの興味深い事実が判明する。それは、確かにヒースクリフは「生きていたくない」という意味合いの発言を何度となく繰り返してはいるものの、実際には彼は「俺は死ぬ」とは一度も明言していないという点である。それどころか、敢えて意地悪く解釈すれば、どの台詞にも「生き続ける」ことを前提としているようなニュアンスが感じ取れるのである。例えば、「俺の将来は、・・・」、「キャサリンを失った後・・・」、「どんな生活を・・・」、更には、「キャサリン亡き後は地獄」、「命無しに生きられるか」、「魂無しに生きられるか」と言った一連の言葉の裏には、どこか未来を見据えているヒースクリフの意図が見え見えと考えられはしないだろうか。つまり、ヒース

15) 『嵐が丘研究』(リーベル出版、平成3年)、p.99.

クリフはあくまで生き続けていく上での困難や辛さをただ単に述べているだけであって、実際には彼自身、「死」への欲求はあるにはあったにしても、彼が本当の意味で「死」を望んでいたかどうかははなはだ疑問が残るところなのである。と言うことは、むしろ、彼は苦しくてもあくまで「生」を生き続けるつもりだったのではないだろうか。確かに、表向きには「死」を望みつつも、同時に本音の所で彼は全くその逆、「生」を極めて意図的に選択していたと解釈出来ないであろうか。もし仮に、この前提が受け入れられるとすれば、世間一般に流布しているヒースクリフ生存の理由、「復讐説」とはかなり異なった生存理由が他に存在する筈である。

そこで、まず、ヒースクリフの生存理由を物語全体の複雑な構造に注目するところから探ってみることにする。何故なら、一般的に言って、物語と言うものは主人公の死と共に終焉の幕を下ろすのがごく普通の決まりである。然るに、この物語は主人公の一人であるキャサリンの死後も延々と続き、且つ、その間、もう一人の主人公、ヒースクリフは逆に生き続けると言う、一般的な物語の常識枠から判断して極めて変則的構造をとっている。そこから、この変則的な枠組みの中にこそ、何らかの作者の意図が隠されているのではないかと考えられてくるのである。

作品全体の章の数は全部で34あり、先ほどから問題にしているキャサリンの死と言う事件は、第16章の初めに登場する。と言うことは、17章以降、ヒースクリフとキャサリンの愛の物語は事実上描かれることはないのである。つまり、キャサリンは物語全体のほぼ真中で死に、いわゆるヒースクリフとキャサリンの恋愛物語もその時点で終わってしまったと考えられないこともないのである。

一般的に言われているように『嵐が丘』が単なるヒースクリフとキャサリンの恋愛物語（ロマンス）であるとすれば、作者はヒロインを作品途中で、しかも物語の半分も行かないところで殺してしまったりすることが有り得るだろうか。1939年にローレンス・オリヴィエの主演で評判になった映画等は全てキャサリンの死で終わっているが、これは偏に一つの恋愛ドラマを終わらせるのにヒロインの死が大変便利で好都合であることを誰しもが認めている事実のためであろう。実際、映画のように恋愛ロマンスのみが主題であれば、ヒロイン、キャサリンの死で、彼女とヒースクリフの世代で物語は完結し、彼らの子供の登場する次世代の物語への移行は不必要、且つ無意味である筈である。然るに物語『嵐が丘』はキャサリンの死後も延々と続く。と言うことは、『嵐が丘』のテーマはヒースクリフとキャサリンの単なる恋物語では無く、もっと別の所

に作者の深い関心があったのではないかと推測されるのである。

ここで一つ考えられることは、以上のような複雑な物語の枠組みは、結局、ヒースクリフは自分の意志で「生きていた」というより、むしろ作者エミリーのある何がしかの深い意図によって、「生かされ続けた」事を物語っているのではないかということである。もし仮にそうだとすれば、正にこの点にこそ、この物語の真の主題を解く鍵が隠されていると思われるのである。そこで、キャサリンの死後におけるヒースクリフ生存の確かな理由をより具体的に探してみたいと考える。

(四)

『嵐が丘』についての従来の批評家の意見を総括してみると、「俗世間とその慣習を徹底的に無視することで己の持つ本来の人間性を歪め、結果、数多くの犠牲者を道連れにして、ついには破滅へと突き進んでゆくタイプの人間の悲劇を古典的なタッチでドラマ化した作品」ということになり、その主人公のヒースクリフは、正に典型的な破滅に行きついた人物、破滅のためにのみ作者によって意図的に「生かされていた」人間ということになるのであるが、果たしてこのようにヒースクリフの死を紋きり口調で破滅そのものと決め付けて良いものであろうか。

確かに、ヒースクリフはキャサリン死後の自分の人生を「俺の将来はただ二つの言葉で片付いてしまうだろう——死と地獄だ、キャサリンを失った後に生きているということは地獄だ」と述べ、破滅的な死へと続く生き地獄に喩えてはいる。しかし、計画どおりに、エドガーの物であったスラシュクロス屋敷とヒンドリーの物であった嵐が丘屋敷の二つの旧家を含めて、リントン家とアンショウ家の全財産を強引に、且つ法的には何の問題も無く自分の物としたヒースクリフは、物語の後半、家政婦のネリーに向かって次のように自己の心境を告白する。

‘It is a poor conclusion, is it not?’ he observed, having brooded a while on the scene he had just witnessed: ‘an absurd termination to my violent exertions? I get levers and mattocks to demolish the two houses, and train myself to be capable of working like Hercules, and when everything is ready and in my power, I find the will to lift a slate off either roof has vanished! . . . I could do it; and none could hinder me. But where is the use? I

don't care for striking; I can't take the trouble to raise my hand! ... I have lost the faculty of enjoying their destruction and I am too idle to destroy for nothing.' (355)

(「情けない結末だよ、全く、そう思わんかね？」ヒースクリフは、たった今日にした光景のことを暫く考え込んで言いました。「俺の暴虐な行動がこんな馬鹿げた結末になっちまったということがさ！おれは二軒の家をぶち壊すために、梃子だの鶴嘴だのを手に入れて、ヘラクレスなみの仕事ができるように自分を鍛えて、さていよいよ何もかも準備が出来、俺のしたい放題に出来るようになった時に、気がついてみたら、両方の家の瓦一枚剥そうという気が、俺にはなくなっちまっているのだ！（中略）やろうと思えば出来た。誰一人俺の邪魔をする者はいない。しかし仇を取ってなんの役に立つだろう？俺は打ちのめす気にならんのだ。手を振り上げるのも面倒なのだ。（中略）俺は奴らの破滅を楽しむという気持を失ってしまった、すっかりものぐさになって、何の役にも立たないのに人を破滅させる気になれないのだ。』)

この描写には、かつての激しい所有欲とか、復讐心に燃えた頃のヒースクリフのイメージは全く姿を消して、それどころかむしろそういった負の感情を綺麗さっぱり昇華してしまった穏やかなヒースクリフの姿が垣間見えてくる。言わば、ここで、ヒースクリフは復讐のために自分が犯した数々の悪魔のような行為の無意味さを認識し、且つその認識から生まれるある種の悟りにも似た境地に到達していると考えられるのである。そして、ここに、「苦しみ」、「罪」等を数多く体験することを通して、初めて真の意味での「救い」に至るという、先に既述したエミリーの重要な主張を読み取ることが可能となってくるのである。岸本京子氏の言葉を借りれば、これこそ「そこに溜まった罪や淀みを浄化する」¹⁶⁾作用である。つまり、エミリーはヒースクリフの心を18年間という長期の期間に渡って汚し続けるのであるが、最終的には彼に「魂の浄化作用」を施し、その結果、ヒースクリフは不純物を完全に排除いた魂本来のあるべき清らかな姿を取り戻すことに成功するのである。ヒリス・ミラー氏は述べる。

The most paradoxical consequence of Emily Brontë's view of the human

16) 松村昌家編『ヴィクトリア朝小説のヒロインたち——愛と自我——』（創元社、昭和63年）、p. 148.

condition is her belief that the suffering sin brings will be sufficient expiation for that sin. Each person is fated to commit a certain number of sins and to suffer a certain amount of pain before he can escape to heaven. ... A certain number of sins are necessary to complete the great work of the exhaustion of evil which will make possible resurrection into the new life.¹⁷⁾

(エミリー・ブロンテの人間についての逆説的結論は、罪がもたらす苦しみは、同時にその罪の十分な浄化にもなるということである。どんな人間も天国へ行く前には数多くの罪を犯し、苦しみを受けるよう定められている(中略)その多くの罪こそが悪を根絶やしにするという偉大な仕事を成し遂げるために必要であり、それによって人間は再生への道が可能となるのである。)

上記ミラー氏の言葉の背景には、既述したエミリーの詩 (No.61) の一節、「あなたが罪を犯したとしても、それは埃にすぎず、あなたの魂はこの世に生を受けたときと同じ清らかな姿で神のもとへ帰ってゆく」をはっきりと窺い知る事が出来るのである。かくしてヒースクリフは、キャサリンと仲良く遊んでいた幼い頃と全く同じ清らかな魂を再び取り戻して、キャサリンの待つ永遠の世界へと旅立ってゆくことが可能となるのである。その根拠として、ヒースクリフの死を描写した次の文章を見てみよう。

I could not think him dead: but his face and throat were washed with rain; the bedclothes dripped, and he was perfectly still. (368)

(とでも死んでいるとは思えませんでした。顔も、喉も、雨で洗われて、蒲団も雫をたらし濡れている中、ヒースクリフは非常に静かに横たわっていたのです。)

ここで、雨、水が人を清める浄化作用、魂の鏡、再生、豊饒、慈悲などを象徴している事を引き合いに出すまでもなかろう。「神よりこの下界に降りそそぐ慈悲の雨」(『ヴェニス商人』4, 1)と述べられているごとく、雨に打たれて死へと旅立ったヒースクリフが、文字通り神からの祝福、並びに魂の浄化

17) *The Disappearance of God*, p. 200.

を受けたことにいささかの疑念の余地はないところである。結局、エミリーがキャサリンの死後も延々と18年間もヒースクリフを生かし続けたその理由とは、ヒースクリフに上記に述べた「魂の浄罪作用」を施すための必然的な結果であると考えられるのである。

(五)

既述したことでも分る通り、エミリーは「魂の不滅」(the immortality of the soul) を信じている作家であることに間違いはないところである。この点を更に裏付ける根拠として、デイヴィッド・セシル (David Cecil) 氏の次に示す文章が参考になる。

She believes in the immortality of the soul. If the individual life be the expression of a spiritual principle, it is clear that the mere dissolution of its fleshly integument will not destroy it. But she does more than believe in the immortality of the soul in the orthodox Christian sense.¹⁸⁾

(エミリー・ブロンテは魂の不滅というものを強く信じている作家である。世間一般に個人の命というものが、仮にその人の精神的信条を表現したものであるとすれば、単に肉体が死によって滅び去ったとしても、死することはないとよく言われることであるが、エミリーは、そうした月並みなキリスト教的な意味合いをはるかに超えた次元で魂の不滅を信じているのである。)

とするならば、『嵐が丘』という作品で、苦しみ、死を通して魂の浄罪作用を受ける人物は、ヒースクリフ唯一人ではなく、今一人の主人公、キャサリンに対しても魂の浄罪作用を施すことで、作者エミリーは自己の主張の作品化により成功していると考えerことはごく自然であろう。そこで、キャサリンの死を通して、彼女の「浄罪」の過程を探ってみることにする。

ヒースクリフはキャサリンが病の床に臥していることを知り、彼女の病気の症状、具合などを自分の目でしかと確かめるために、夫のエドガーの留守を狙って極めて強引にキャサリンの病室に入り込み彼女との面会を果たしてしまう。

18) "Emily Brontë and *Wuthering Heights*" in *A Wuthering Heights Handbook*, p. 27.

その結果、キャサリンの全快の見込みが全く無いことを悟り、ヒースクリフは激しい絶望感に襲われていく。しかし、絶望するヒースクリフの姿を見ても、死期迫ったキャサリンは彼に一抹の同情を示すどころか、むしろ彼を一見突き放したような非常に冷めた態度で臨み、逆に自己の苦しむ心情を次のように告白する。

I shouldn't care what you suffered. I care nothing for your sufferings. Why shouldn't you suffer? I do! (168)

(あなたがどんなに苦しくたってかまやしないわ！あなたの苦しみなんかなんとも思わなくてよ。あなただって苦しむのが当然じゃないの？私は苦しんでいるわ！)

言うまでもなく、ここでキャサリンが苦しんでいるのは、ヒースクリフに対する裏切りという罪のためである。ではその裏切りとは何か？勿論、それは彼女がその結婚相手として、ヒースクリフではなく、エドガーを選択したことである。実際、キャサリンはエドガーと結婚することに決めた時、ヒースクリフと自分は同じ魂を持っており、「私はヒースクリフよ！」(I am Heathcliff!)と次のように断言したにもかかわらずである。

My love for Linton is like the foliage in the woods: time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath: a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I *am* Heathcliff! He's always, always in my mind: not as a pleasure, any more than I am always a pleasure myself, but as my own being. (86)

(リントンへの私の愛情は森の木の葉みたいなもので、冬が来れば樹の姿が変わるように、時が経てば変わることを私はちゃんと知っているわ。ヒースクリフへの愛は地底に眠る永遠の巖に似て、目に見えなくてもなくてはならない喜びの源なの。ネリー、私はヒースクリフよ！あの人はいつも——私の心の中にいる。私自身が私にとって必ずしもいつも喜びではないのと同じように、あの人も喜びとしてではなく、私自身として、私の心の中にいるの。)

確かに、これらの言葉とその時の気持に嘘があったとは思えない。しかし、

同時にキャサリンは「今、ヒースクリフと結婚すれば墮落するだけだわ」(It would degrade me to marry Heathcliff, 84)、「もしヒースクリフと私が結婚したら、二人とも乞食になるほかない。だからこそリントン家へ嫁に行つて彼を守りたててやるのだ」(if Heathcliff and I married, we should be beggars? whereas, if I marry Linton, I can aid Heathcliff to rise, 85) 等と一見矛盾したことを述べてもいる。つまり、キャサリンがどんなに雄弁を揮おうとも、このエドガーとの結婚に対しての自己矛盾は明白であり、それはエドガーの容貌や財産に魅惑された結果であり、同時にヒースクリフと自分自身に対する愚かな裏切り行為であったことは間違いのない事実である。たとえいくら装いや振る舞いを「持てる者」である紳士階級の間人らしくしたところで、嵐が丘の厳しい自然の中で、ヒースクリフと共に育った自然児キャサリンの本質がそれほど急に変わる筈がない。彼女はあくまでも野性味あふれた激しい人間であり、リントン家とは永遠にそぐわない本性の持ち主である。にもかかわらず、キャサリンはその炎のような自分を偽り、二重人格者のような行動に出て、自らをリントン家に無理やり迎合させ、彼女の命の源である嵐が丘、並びに彼女の魂そのものでもあるヒースクリフと別れて、全く異質なエドガー・リントンに嫁ぐ決心をしてしまったのである。こうした一連のキャサリンの裏切り行為は、まさにヒースクリフの最も純真で、最も強烈な愛情に対する裏切り行為そのものであり、同時に自己を否定する背信行為以外の他の何物でもない。こうしたキャサリンの裏切りについて、アーノルド・ケトル (Arnold Kettle) 氏は、「あらゆるもの、即ち、生と死の中で最も大切な物、全てに対する裏切りである」(a betrayal of everything, of all that is most valuable in life and death)¹⁹⁾と強く弾劾する。

確かにキャサリンの述べるように、何一つ己の財産を所有しないヒースクリフと結婚することは乞食同然の生活を意味しており、いずれにしても破滅の道しか残されてなく、エドガーとの結婚の選択は避けられない運命であったのかもしれない。しかし、だからと言って、キャサリンの行動が許されるはずもなく、結果、彼女の選択したエドガーとの結婚という行為は、彼女の犯した罪の中でも最大のものであることになんら変わりはないのである。言ってみれば、キャサリンは「己の魂」であるヒースクリフへの純粹で絶対的な愛よりも、エ

19) "Emily Brontë: *Wuthering Heights*" in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights* edited by Thomas A. Vogler (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1968), p. 33.

ドガーという紳士階級への相対的な愛を選択したわけで、既述したヒースクリフの言葉「不幸も、墮落も、死すらも、いいや神や悪魔が与えるどんなものも、断ち切る事の出来ぬ俺たち二人の絆」をキャサリンは自らの自由意志で断ち切ってしまったのである。そして、それほどの絆であればこそ、再度繰り返せば、キャサリンが犯した罪はそれだけ大きく、救いようがないのである。だからこそ、作者のエミリーは次のように死の直前のキャサリンにその罪の深さを認識させるのである。

‘If I have done wrong, I’m dying for it. It is enough! You left me too: but I won’t upbraid you! I forgive you! Forgive me!’ (171)

(私が悪かったとしても、私はそのために死んでゆくのですもの。それで充分じゃありませんの！あなただって私を捨てたわ、でも私はあなたを責めないわ！あなたを赦してあげるわ！だから私も赦して！)

そして、そのように自分の罪の深さに気付き、悩むキャサリンであればこそ、逆にその罪と苦しみによって、キャサリンは救われる可能性が生まれてくるのである。何故なら、もう既に何度となく指摘したように、エミリーの主張の基盤には、「罪と苦しみは同時にその罪の十分な浄化となる」と言う逆説的結論が潜んでいるからである。故に、キャサリンの死を描くに際して、作者、エミリーは次のような穏やかで平和な描写に徹することが出来たと判断されるのである。

Her brow smooth, her lids closed, her lips wearing the expression of a smile; no angel in heaven could be more beautiful than she appeared. And I partook of the infinite calm in which she lay: my mind was never in a holier frame than while I gazed on that untroubled image of divine rest. I instinctively echoed the words she had uttered a few hours before: ‘Incomparably beyond and above us all! Whether still on earth or now in heaven, her spirit is at home with God!’ . . . ; and her latest ideas wandered back to pleasant early days. Her life closed in a gentle dream — may she wake as kindly in the other world! (175-178)

(キャサリン様の額は安らかで、まぶたは閉じられ、唇は微笑を帯びて、天国のどんな天使もこれほどまでに美しくはあるまいと思われました。私までも、キャサリン様が横たわる無限の安らかさの中に身を置く思いがし

たほどです。私の心は、なにものにも煩わされることのない神々しいばかりの安息の中におられる御姿を見つめて、かつて覚えたことの無いほどの清らかさにひたっておりました。私は思わず、奥様が何時間か前におっしゃった言葉を繰り返してしまいました——「私たちみんなのとても及ばないほど高く、遠い所へ行ってしまわれたのだ！まだ地上におられるにせよ、もう天国に行かれたにせよ、この方の霊はもう神様の御許に安らっておられるのだ！」(中略) ご臨終の時の思いは、楽しかった幼い頃の思い出に帰っておられたのでございます。やさしい夢を見ながら、一生をお閉じになりました——どうかあの世でも同じ安らかなお心で、お目覚めになりますように！)

上記引用文と既述したエミリーの詩 (No.61) の一節とが伝える内容の類似性は明白である。

もし、あなたが憂いに満ちたこの世で罪を犯したとしても
それは荒涼としたあなたの住処の埃にすぎません
あなたの魂はこの世に生を受けたときは清らかでした
そしてその清らかな姿でふたたび神のもとへ帰ってゆくのです。

確かに、すべての人間は生存中、数々の罪を犯し、その犯した罪によって地獄に墮ちる運命を神から定められているかもしれない。だが、ここでエミリーは訴える、「最後の瞬間には、その神の定めが逆転する場面の到来は期待できるのだ」と。この点に関して、既に数回触れた彼女のエッセイ「蝶」の中の「醜い毛虫から蝶へのメタモルフォーゼ」の文章は、必読に値する。

I had scarcely removed my foot from the poor insect when, like a censoring angel sent from heaven, there came fluttering through the trees a butterfly with large wings of lustrous gold and purple. It shone but a moment before my eyes; then, rising among the leaves, it vanished into the height of the azure vault.²⁰⁾

(私が踏み潰した毛虫から足を離すや否や、天上から遣わされた叱責の天

20) *The Belgian Essays*, p. 178.

使のように、美しい金色と紫色に輝く大きな羽を持った蝶が、木々の間を羽ばたいて行きました。蝶はほんの一瞬私の目の前で光り、それから木の葉の間を昇って、碧空のかなたへ消えて行ったのです。

かくして、ここに、ヒースクリフと同様、キャサリンは幼い頃と全く同じ清らかな魂を再び取り戻して神の御許へ帰って行ったという「魂の浄罪作用」を読み取ることが可能となるのである。

(結び)

思うに、西欧キリスト教世界を理解するにあたって、この世に存在する全ての否定的なものは、その全く逆の肯定的なものへメタモルフォーゼすると言う一つの大きいなる逆説的真理を受け入れる必要がある。つまり、この世に在る苦痛、死、暴力、悪、罪といった否定的なものは、その姿を変えて最終的には善的なものになり、再生、復活になくなくてはならないものになるのである。そして、このキリスト教の世界における根本的な価値転換の過程を「この世界の二重像」(the double vision of the world)として描くことが、押し並べて西欧作家たちの重要な責務であると言って差し支えないのである。例えば、「この世界の二重像」について、T.S.エリオットは彼の代表的な詩劇『寺院の殺人』の中で次のように述べている。

Thy glory is declared even in that which denies Thee; the darkness declares the glory of light.

Those who deny Thee could not deny, if Thou didst not exist; and their denial is never complete, for if it were so, they would not exist.

They affirm Thee in living; all things affirm Thee in living; the bird in the air, both the hawk and the finch; the beast on the earth, both the wolf and the lamb; the worm in the soil and the worm in the belly.

.....

From such ground springs that which forever renews
The earth

Though it is forever denied.²¹⁾

(その栄光はあなたを否定するもののうちにも啓示され、世の暗黒も光の輝かしさを明らかにしているだけなのです。

あなたを否定しようと思っても、もしあなたがいらっしやらなければ、否定することだって出来はしないのです。彼らの否定は完全ではありません。もし完全なものなら、彼らも存在しないでしょう。

生きているからには、あなたの存在を肯定しているのです、すべてのものは生きることによってあなたを肯定しているのです。空飛ぶ鳥、鷹もその餌食となる小鳥も、地を這う獣、狼も子羊も、土の中の蛆虫も、腹の中の蛔虫も。

(中略)

ああ、そういう土地から、永遠に否定されながら永遠に大地を新しくするものが絶えず湧きあがるのです。)

これで理解される通り、否定的なものの中に肯定的な要素を見るという「この世の二重像」に関してのエリオットの主張は明白である。そして、こうした西欧キリスト教作家に共通して見られる特徴は、そっくりそのままエミリー・ブロンテにも当てはまることなのである。ヒリス・ミラー氏は語る。

In several of the poems of *Emily Brontë* [italics not in the original] the same *double vision of the world* [italics not in the original] appears. The world is at once the ugly sight it appears to mortal eyes, and at the same time those same elements glorified and transformed into their opposites. Every bit of suffering, violence, and sin is necessary and good, for all are required by the ultimate transfiguration.²²⁾

(エミリー・ブロンテの詩のなかにも、この世界についての同様の二重像が見える。この世界は人間にとって醜悪であると同時に、この醜悪なものが神の恵みを受けて全く逆の栄光ある姿へと変身していくのである。つまり、この世に存在するどんな些細な苦しみ、暴力的なもの、そして罪すらも、最終的に神の栄光を受けた姿へと変身していくためにこの世になくなくてはならないものなのである。)

エミリー自身、「この世の二重像」について次のようには語っている。

21) *Murder in the Cathedral* (A Harvest/Hbj Book, 1964), pp. 86-87.

22) *The Disappearance of God*, pp. 202-203.

Let not the creature judge his Creator; here is a symbol of the world to come. As the ugly caterpillar is the origin of the splendid butterfly, so this globe is the embryo of a new heaven and a new earth whose poorest beauty will infinitely exceed your mortal imagination. And when you see the magnificent result of that which seems so base to you now, how you will scorn your blind presumption, in accusing Omniscience for not having made nature perish in her infancy.²³⁾

(創造物に「創造主」を批判させてはいけない。何故なら、この地上には、来るべき世界の象徴となるものが存在するからである——例えば、醜い毛虫が、ちょうど美しい蝶に変身する初めであるのと同じように、この地球は新しい天国、新しい地球の萌芽なのである。従って、この地球で最も貧弱に見える美でさえも、我々人間の想像力をはるかに越えた存在なのである。故に、今現在、非常に卑しいと思っているものが、将来栄光ある姿へと変身してゆく結果を見る時、その創生期に自然界を破壊しておかなかったからといって、「全能の神」を非難した自分の愚かさ加減になんと嫌気がさすことであろうか。)

この拙論の序文で触れた彼女の一連の詩 (No. 61, 133, 183, 191,) も、同じく、エミリーの思い描く「この世の二重像」について語ったものであり、加えて次に掲げるエミリーの詩 (No. 181) の一節の内容もその例外ではない。

“The Spirit bent his dazzling gaze
Down on that Ocean’s gloomy night,
Then — kindling all with sudden blaze,
The glad deep sparkled wide and bright —
White as the sun; far, far more fair
Than the divided sources were!” (221)

(「精霊」はその眩い視線を
あの大洋の暗い夜陰に向けた、
それから——突然の強い輝きですべてを照らすと、
海原は喜んであまねく煌煌と発光した——

23) *The Belgian Essays*, p. 178.

太陽のように白く、分かれてゆく流れの源よりも
はるかにもっと美しかった！)

真っ暗な「黒い」海が、突如、光り輝く喜びに満ちた「白く」美しい海に変容していく過程の描写は、既述した「この地球で最も貧弱に見える美でさえも、我々人間の想像力をはるかに越えた存在なのである。故に、今現在、非常に卑しいと思っているものが、将来栄光ある姿へと変身してゆく」と主張するエミリーの「この世の二重像」そのものの描写でもあるのである。

かくして『嵐が丘』に描かれた暴力的、悪魔的とも思える世界は、ヒースクリフやキャサリンの二人が、作者の言葉を借りれば「たとえ罪を犯したとしても、人は清らかな姿で再び神のもとへ帰る」と言う「魂の浄罪」を経て、永遠の世界、無限の愛と喜びを得るためにどうしても必要な物であったのである。即ち、彼らの体験する数多くの罪と苦しみに満ちた激しい生と死こそが、その死後、彼らの魂が祝福され天国で完全に一つになるための絶対的必要条件であったと考えられるのである。故に、ケトル氏が述べるごとく、最終的に「キャサリンとヒースクリフの死は一つの勝利」(The deaths of Catherine and Heathcliff are indeed a kind of triumph)²⁴⁾となるのである。そして、このことは、小説『嵐が丘』の語り手、ロックウッドの語る、物語の最後の場面、ヒースクリフとキャサリンの眠る墓地の描写で見事に明らかにされるのである。

I lingered round them, under that benign sky; watched the moths fluttering among the heath and harebells, listened to the soft wind breathing through the grass, ... (372)

(穏やかな空の下、僕は墓石の周りを歩き回り、ヒースや釣鐘草の間を飛び交う蛾を眺め、草にそよぐかすかな風に耳を傾けた・・・)

ヒリス・ミラー氏は、上記の文章中の「蛾」に特に注目して、ヒースクリフとキャサリンがその死後、無限の安らぎの世界にあることを窺い知ることが出来る根拠として次のような意味深い指摘をする。

The signs that the sufferings of Cathy and Heathcliff have been trans-

24) "Emily Brontë: *Wuthering Heights*", p. 42.

formed into the boundless peace of heaven are the “moths fluttering among the heath and harebells” which Lockwood sees at the very end of the novel. . . . Cathy and Heathcliff have reached the peace of union with one another through God, . . .²⁵⁾

(苦悩するキャシーとヒースクリフが無限の安らぎの世界に入っていったということは、作品の終わりの場面でロックウッドが目にした「ヒースや釣鐘草の間を飛び交う蛾」で明らかである . . . つまり、キャシーとヒースクリフは、神の存在を通して最後にしてやっとお互い同士、平和な結びつきの世界に到達するのである。)

言うまでもなく、ここでの「蛾」は「蝶」を意味している。とするならば、既に示したエミリーの文章「醜い毛虫が、ちょうど美しい蝶に変身する初めである」(the ugly caterpillar is the origin of the splendid butterfly)²⁶⁾は、再度注目に値する。フランク・グッドリッチ氏もこの文章の重要性に触れて、次のように述べる。

She uses the image of the butterfly springing forth from the caterpillar to illustrate how the soul is liberated by death into an eternal realm of happiness and glory:²⁷⁾

(エミリーは、魂が死から解放されて神に祝福された永遠の世界に入ってゆくことを示すために、醜い毛虫が美しい蝶へ変身していくイメージを使う。)

並びに、「毛虫の蝶へのメタモルフォーゼ」は、従来、キリスト教の伝統に従えば、「復活」や「魂の解放」の象徴であるという事実等を考慮すれば、エミリー・ブロンテが、この矛盾と不条理に満ちた、まさに否定と肯定という現世の二重像を描く中、「浄罪と再生」のテーマを追及していった作家であることは火を見るよりも明らかである。

25) *The Disappearance of God*, pp. 201-204.

26) 註 23) 参照。

27) “A New Heaven and a New Earth”, p. 179.